

わたしたちがうごと、まちはもっと楽しくなる

大倉山つながり JAM 望月啓代

1. 30代のママたちが考えていること

生まれて2年、まだひよっこの活動です

先ほど“ミエル”が3周年という話がありましたが、この“大倉山つながりジャム”はそれ以降に“ミエル”の中から生まれているので、もう本当に2年くらいの活動です。メンバーも15名くらいの地域のママたちグループというのが現状でして、ハロウィンなどの地域のイベントの時に集まって手伝いをしたり、月に一回“つながるサロン”を“ミエル”で開いているというような活動になります。まだ本当にひよっこの私たちが京都までおじゃまさせていただいて、仮に何かをお伝えできるとしたら、私たちがのような30代のママたちが、何を考えていて、どんなきっかけで、こういった活動に関わるようになったのか、そこからどのように広がっていったのかくらいが伝えられることではないかと思ひまして、参りました。



3人の子育て中のママです

私自身は大学時代を京都で過ごしておりまして、すごく京都が好きで、京都に行けるということで、喜んで引き受けさせていただきました（笑）。

●簡単に、自己紹介をさせてください。

望月啓代（もちづき たかよ）
 家族構成 夫・子ども達（6才、4才、2才）
 二人目出産までは、サラリーマン。しかし、幼児二人を抱えてサラリーマンを継続する事に大変さを感じ退職。
 細々とライターの仕事などしている間に、色々な出会いから地域活動に目覚める！

簡単に自己紹介をさせていただきますと、私には夫と子どもが3人おります。小学校1年生と4歳と2歳の保育園に通っている子どもです。2人目出産までは、普通にサラリーマンとして会社勤めをしておりました。当時も大倉山に住んでいたのですが、幼児2人を抱えて、会社のある銀座まで通うのが結構大変で退職をしました。

ママたちのジレンマ

当時私は何を考えていたかなと思うと、もちろん大倉山に住んでいて、地域に暮らしているけれども、地域に全く興味がなかったと言いますか、興味がないということにも気づいていなかったのだと思います。ましてやそこに面白さがあるということも考えていないし、知らないことに罪悪感もないという状態でした。仕事で都内に行っているけれども、自分が参加したいようなワークショップは、平日の夜にあつて、子どもがいると夜は大倉山に帰らなければならない。土日も出にくいですから、「面白いものは都内にあつて、自分は行けない」という、そんなフラストレーションを結構感じていた時代だったなと思います。ですからフルタイムで働いていて、地域で暮らしていても、幼稚園コミュニティとか保育園コミュニティはあるものの、そこから地域にまで目線が行っていないというお母さん達は、結構多いのではないかと思います。

2. まちを歩いて

まちに目を向け始めたきっかけ

さて、退職後、私は細々とライターの仕事を始めました。その取材を通して、街を歩くなかで、“大倉山ミエル”さんともそうですが、色々な出会いがあ

りました。そこから地域の課題感みたいなものを感じていって、地域というものに視線が向いて行くようになったのだと思います。

ライターの仕事の中で、“リトルママ”というサイトがあって(今もやっています)、子育て系の地域活動をたくさん取材する仕事があるんです。地域のママたちが主体となっているサークルもあれば、地域の子育て広場等、ありとあらゆる地域に密着した情報を取材してくるという仕事です。取材をしていると、すごく素敵な活動にたくさん出会うことになりました。

すごく素敵な活動なのに、知られていない…

たとえば、大倉山の地区センターで、ピアノの先生がわらべ唄を広めていくという活動を、サークルみたいな形でやっておられる。その先生は「親子の愛着形成にはわらべ唄がすごく効果的だ」という思いを持って、ご自身の子育ては終わっているにも関わらず、「次の子どもたちに、どうしてもこの方法は必要なのよ!」と、それは一生懸命取り組まれていたわけです。ところが私が取材に行く日、「望月さん、明日天気が悪そうで、もしかしたら子どもが一人も来ないかもしれないから、なんなら望月さんの子どもを連れて来て」と連絡がありました。どうやら集客にすごく困っていらっしやるようです。そこで私の子どもと、近隣の子どもたちにも声かけをして、一緒に出掛けて行きました。子どもたちはすごく喜びましたし、ママたちからも「こんな素敵な活動があったのに、しかもこんなに家のすぐ近くでやっているのに、全然知らなかった…」という声があがったんです。“リトルママ”というサイト自体は、関東の1都3県で展開しているので、地域密着と言っても、幅広いウェブサイトの情報発信という位置づけで、そういう活動自体、取材して情報発信しているのですが、なかなか地域の中の細かいところまで行きわたっていないのが、現状なのです。

「誰かのために」という視線に驚きを感じて…

こんなすごく素敵な活動があるのに地域に知られ

ていないということと、当時私も子育てで手いっぱい、自分のことばかり考えていたので、「次の世代のために」という視線自体にすごく驚きがありました。そんな素敵な活動が目の目を見ていない残念さを感じていた時に、“大倉山ミエル”さんとの取材を通しての出会いがありました。

3. “大倉山ミエル”との出会い

情報を発信したい人と地域で吸収したい人と

“大倉山ミエル”さんと出会った時も、正直まだ私の中には、「面白いことって、都内にしかないんじゃないの?」みたいな思いはありました。いかにもママ向けではない、もっと知的好奇心をくすぐられるものを求めて「都内に行きたい!」と思っていました。ところが、“ミエル”に出入りしてみると、退職した大学教授や、高いスキルや知識のある人たちが出入りをしていて、その人たちが「自分のこの知識をもっとみんなに伝えたい」と、どうも思ってくれている。身近でこんなに情報を発信したい人がいて、私たちみたいな「自分の地域で色々な情報が吸収できるとすごくうれしい」と思っている人たちが出会えるとしたら、なんて素敵なことだろうと、当時素直に感じたんです。

4. “大倉山つながりジャム”のはじまり



望月さん、やってみたら?

“大倉山つながりジャム”は、いきなり“つながりジャム”のワークショップをやるところから始まりました。横浜市経済局さんから“ミエル”

にお話があったのですが、「やり方自由で、何をやってもいいけれど、ソーシャルビジネスやまちづくりの輪を広げるみたいなことをしてください」という、すござっくりした事業内容でした。“ミエル”にそんな話があった時に、鈴木さんが「望月さん、やってみたら？」みたいな軽い感じでバトンタッチされたんです。

若い世代に繋げるために任せていく

私は今でもこのつなぎ方は大事だなと思っています。町内会の会議などに出席させていただくと、本当に縦の社会で(横浜よりも京都は歴史が深いので、もしかしたら、よりそうなのかもしれません)、70~80才代のおじいさま、おじさまたちが一生懸命まちのことを考えていらっちゃって、私たちのようなひよっこに、なかなかバトンタッチしていくということが難しいものです(私たちがあまりにもひよっこすぎるところもあるかもしれませんが)。でも鈴木さんは地域の担い手を広げていくという目線を持っていて、「次世代に繋げるために任せていく」ということをやってくれたんだろうなという気がしています。

そんなことを思っていたら、先日“ミエル”の3周年イベントがあったのですが、他の誰かも鈴木さんに「じゃあ、それ、あなたがやりなさい」と、軽く悪魔のように、微笑みながら伝えられて(笑)、「なんとなく私がやることになりました」みたいな人がたくさんいました。やっぱりそうやって適材適所を見ながら、人にバトンタッチして任せていくことで、輪が広がっているのではないかと。鈴木さんから声をかけられた頃の私は、時々“ミエル”のイベントを手伝っている人みたいな位置づけで、鈴木さん自身もそれほど私の事をご存じなわけではなく「元気そうな人だな、一緒にやれそうだな」というところで目を掛けてくれたんだと思うんです(笑)。任された私たちも、お手伝いという感じではなく、主体的に頑張っていくという位置づけになれたので、今に繋がっているのかなという気はしています。

言葉先行ではなく、自分たちが楽しむために

2011年1月から活動を開始したんですが、当時、山崎亮さんが出ていらっしゃった頃で、ライフデザインとか、ソーシャルデザインとか、そういう言葉が流行っていて、かっこいいねみたいな感じではあったのですが、なかなか私たちがまちでソーシャルデザインを語るというのは、ちょっとピンとこないところがあって、言葉先行ではなく、自分たちの中から実感をもって生まれる言葉とか、生まれる活動がいいよねというところで、「私たちがうごくともちはもっと楽しくなる」を合言葉に活動を始めました。

横浜は比較的子育てサービスが充実しているのですが、その一方でサービスが充実しているが故に、ママたちがわりと受け身になっている側面もありました。でも実際に、私たちが動いてみると、いろんな楽しさを体感できるし、ひいてはそれをまちに広げられるはず。ボランティアで「誰かのために云々…」ということではなく、自分たちの暮らしがもっと楽しくなるんじゃないかというメッセージでやっていきたいと始まったのが“大倉山つながりジャム”です。

5. ワークショップで心がけたこと



フィールドを活かしたい

さて、この“大倉山つながりジャム”ワークショップは5回連続講座として行いました。その参加者というのが、私が一本釣りをして声をかけた人も多く、何かの先生をやっているとか、わりと情報感度の高い方たちだったんです。比較的、いろんな事を知っているし、講演会などに行く機会が結構あるら

しいママたちが、17名参加してくれていました。決して座学が悪いと言っているわけではないのですが、大倉山は商店会と連携しているところが非常に大きいので、そこを存分に生かしたワークショップにしたいということを、まず考えました。

ママたちのスキルの洗い出し

5回連続講座なので、まずママたちのスキルの洗い出しをしました。このママたちは、過去は普通の会社員として働いていた方なのですが、今は子育てをやっていたり、料理教室をやっているというママたちが多く、まず場をあたためるといことと、どんな人がいて、何ができるのか、スキルの洗い出しを付箋を使ってやっていくということを行いました。

商店会の困りごととの掛け合わせ

さらに、ともするとママたちが勝手に楽しくやっているということで終わらせてはいけないので、商店会の抱えている課題も掛け合わせて自分たちの活動もできるよう、何をやるかを考えていきました。4回目には、商店会の会長さんをお招きして、実際に商店会の声を聞いてみました。悩みを聞きながら、ママたちのスキルと掛け合わせることで、商店会のお困りごとや、なかなか着手できていないところを、自分たちも楽しく参加しながら、共に解決していくというようなやり方ができるといいなという思いでやってきました。

話し合ったことが形になる手ごたえ



ワークショップの最後に、“ぶんぶんカフェ”までたどり着いたところが、後にもつながっているのではないかと思います。やっぱり自分たちが話し

合ったことが形になったことが、ママたちも手ごたえを感じてくれ、「自分たちがうごとと、まちが楽しくなるんだ」ということを実感できたワークショップとして終われたのかなと思っています。

6. 楽しい！という実感を繋げる

「まちづくり」で声かけしても集まらない…

「このワークショップやります！」と言ってから、地域の子育て支援拠点が情報発信しているメルマガに発信したり、チラシを一生懸命撒いたりしたんですが、なかなか参加者を集めることができませんでした。本当に全然反応がないという状態で、17名参加してくれたうちのほとんどが、私が地域の取材の中で出会ったママたちでした。ぶっちゃけ「望月さんに誘われたから来ました」という状態だったわけです。

まちを知れば面白い！

「まちづくり」や「地域」に、全然興味はないし、「地域って、なに？」という状態のお母さんたちばかりだったのですが、彼女たちもワークショップの中で、養蜂事業だけをとって見ても、「商店会の人、こんなに一生懸命、蜂を育てているなんて、びっくり」みたいな単純な喜びから、「実際に自分たちにも地域の中で活躍できる場があるんだ」という発見まで、「知れば面白い」ということを体感してくれたのだと思います。彼女たちは、今も一緒に活動をしてきているコアメンバーになっています。

今のママたちの本音

私もそうだったように、別に悪気はないんですが、ママたちは本当に地域のことを知らないんです。自分がまちに興味や関心がないということも自覚していませんけど、「知れば面白い」というところが、私を含め“大倉山つながりジャム”に参加してくれたママたちの本音ではないかと思っています。

以後、“大倉山つながりジャム”のワークショップは、なるべくハロウィン等の大きなイベントの時に、

その楽しさの中から、新しいスタッフをつかまえ、なるべく人を増やして巻き込んでいくことを意識してやっています。「まちづくりを一緒にしませんか？」というダイレクトなメッセージでは、なかなか引っかかってくれる人がいないものですから、そういう変化球でやっていくということ、意識してやっています。

7. “つながりジャム” から生まれたこと

“おへそ”の誕生

ワークショップの中で、「大倉山にコ・ワーキングスペースが欲しい」という意見がありました。そういった意見から「じゃあ横浜市に“まち普請事業”という事業があるから、それにエントリーしてみたら」という鈴木さんの意見があって、“おへそ”の開設に向け、動き出したという背景があります。ですから“つながりジャム”から、さらに活動の輪が広がってきているなという実感は持っています。

フリーペーパー“アイネット”の発行

また、“アイネット”というフリーペーパーも、“大倉山つながりジャム”のメンバーが始めました。大倉山の隣に綱島という駅があるのですが、このあたりはおうちサロンを開いている先生が非常に多くて、この“つながりジャム”のメンバーの中にも何人もいますものから、「共にロコミで集客ができるような媒体があったらいいね」という話になりました。これは年に一回“アイネット”というフリーペーパーを発行するという動きとして始まっています。

8. ふるさとづくりと新しい地縁

子どもたちのふるさととしての大倉山

さらに今、“まち普請事業”にエントリーをしています。これは「大倉山をわたしたちのふるさとに」というメッセージを込めて、プレゼンテーションに臨みました。私自身が静岡出身で、横浜出身ではあ

りません。大倉山に住んで、7~8年くらいなのですが、そうはいっても私の子どもたちは、大倉山で育って、ここがふるさとになる場所になるであろうと、地域の中で子育てをしたいと強く思っています。今、実際に私は3人子育てをしているのですが、すごく地域の方にお世話になりながら子育てをしています。うちも核家族なんですけど、地域の中で子どもと一緒に育ててもらっているという意識があるんです。ですから、このメッセージを込めながら、“まち普請事業”というものを進めていきました。



新しい地縁 — 性別も世代も超えて

また、もう1つ重要なキーワードとなっていたのが“新しい地縁”という言葉です。この“まち普請事業”は、鈴木さんと私と、もう一人、松江川さんという3人で進めていたのですが、私と松江川さんは30才代で、鈴木さんはもうちょっと上なんですけど(笑)、地縁と言えば、もちろん町内会もあるし、「今さらなんで地縁なの？」みたいな感じがあって、ここは結構議論になりました。でも、私たちには地縁がないんです。横浜に引っ越してきて、小学校に入るまでは、子ども会にも入れないし、地域で縁と言っても、全くありませんでした。そこに大倉山という地域をベースに、鈴木さんと繋がったり、地域の人と繋がったりするところに、新しさや面白さを感じていたんです。今はインターネットもあるし、同じ趣味嗜好の人と繋がるのは、すごく簡単で、集まりやすいなという実感は、皆さんもおありだと思っております。逆にそこにも同じような人たちがばかりが集まる行き詰まりみたいなものがあって、私たちもママばかりで集まると、やっぱりある程度のと

ころまでしかいかないという実感があるんです。それを地域でくくってみると、もっと広く、もっとおもしろい人たちと繋がれて、新しい何かが起こるんじゃないかという期待感を、私たちはこの“つながりジャム”などの活動を通して、感じてきたわけです。“地縁”という言葉にどこか違和感を持ちつつも、最終的には「30才代のママたちはそう考えるんだ」というところで、周りの年上の方たちも納得くださって、「新しい地縁を大倉山でつくるんだ」というメッセージを込めながら活動をしています。

今日は女子力がテーマなんですが、女子力だけでもいけないという実感はすごくあります。そこを使いつつも、世代を超えて、性別を超えて、何かを一緒にやっていくという面白さをつくることのできるのが地域なのではないかと、私は今、感じていて、これからも活動を続けていきたいと思っています。

